巻頭特集

# 授業『専修大学の歴史』が意義深い

昭和39年に竣工した生田校舎旧３号館。屋根のデザインが特徴的だった。

専修大学１年次に『専修大学入門ゼミナール』（全15回）という授業が行われています。これは、専修大学生として、有意義な４年間を過ごすために、大学の学修や生活上のマナー、大学で学ぶ意義といった心構えから、ノートのとり方、レジュメの作成方法、プレゼンテーション方法などを半期にわたって学習する講義です。

その中の１コマとして行われているのが、『専修大学の歴史』です。文字通り、専修大学の歴史を学ぶ90分ですが、この講義を行う意図はどのようなところにあるのでしょうか。そこで、校友であり同授業の担当教員も務めている法学部准教授 坂誥智美先生に、『専修大学の歴史』や自身の専修大学での思い出、大学に対する思いなどを語っていただきました。

## 専修大学生ということに自信と誇りを持ってもらうために

専修大学
法学部准教授
博士（法学）
坂誥智美先生

**さかづめ　さとみ**●東京生まれ。1990年法学部法律学科卒業。98年専修大学大学院法学研究科公法学専攻博士後期課程修了（専攻・日本法制史）。主な編著書に『玉川上水通船史料集』（共編）、『江戸城下町における「水」支配』などがある。

### 歴史を知ると気持ちが変わる

この授業には、専修大学の建学の理念や先人たちの努力の歴史などを学んでもらうことで、本学に対する理解を深めてもらうとともに、専修大学に集うものとしてのアイデンティティを持ってもらいたいという思いが込められています。

専修大学は、レベル的に中堅に位置しているため、入学してくる学生たちの心のもちようもさまざまです。

たとえば、ウチが第一志望だった学生は『よし！』と前向きな気持ちで大学へ通っています。１年生に行ったアンケートを見ても、「さまざまな講座があって将来役に立ちそうな気がする」とか、「就職率が高い」などポジティブなイメージを持って、入学してきた学生がたくさんいることがわかります。なかには、「大学の提供する授業やサービスを最大限活用すれば、自分のキャリアアップにつながりそう」という向上心の強い学生もいました。

その一方、上位の大学に落ちてウチに来た学生の中には、「受験に負けた」と考え、何となくネガティブな気持ちを抱えたまま、大学生活をスタートしている子が少なくないと思うのです。

『専修大学の歴史』の授業で使われている冊子とDVD。どの教材をどのように使うかは、講義を担当する教員に任せられている。

『専修大学の歴史』（平凡社）2009年に発行された全287ページの書籍。建学への道のりから社会知性の開発まで、専大の歴史を深く知りたいなら、この一冊！

しかし、それでは専大にいる意味がありません。「専大だから、これしかできない」などと後ろ向きに考えるのではなく、「専大で何をしようか」と考えたほうが、将来的にプラスになるものが大きいはずです。専大でトップをとって、かつての第一志望へ入学した学生を見返せばいいじゃないですか。

でも、そう考えられるようになるには、専大を好きになる必要があります。この大学へ通って良かったと思える何かが必要だと思うのです。その“何か”になりうる一つが、専大の歴史や大先輩たちの努力を知ることです。

『専修大学の歴史』の授業で、専修大学が明治時代に法律家の養成を目的として設立された専門学校（高等教育機関）の一つであり、法政大学や明治大学、早稲田大学、中央大学とともに「五大法律学校」と呼ばれていたこと。その後、「経済の専修」「計理の専修」と呼ばれるようにもなったこと。関東大震災で未曾有の被害を受けながらも、先輩方の努力のおかげで見事立ち直ったことなどを知った学生は、大学への思いを新たにします。「先輩たちの努力を知って、自分も頑張ろうと思った」と話す学生もいます。

２年次以降、選択科目として専大の歴史をより深く学べる授業があるのですが、それを履修した学生からも同じような意見を聞けます。本学は、1922年、大学令により認可され専修大学となりましたが、実は、当局側は大学へ昇格することに消極的でした。それに業を煮やした学生たちが授業を自主休講して決起集会を行い、自分たちで寄付金を集めて直談判したのです。そういう先輩たちがいたからこそ、今の専修大学があるのだと知った学生たちはとても驚き、「このままじゃいけない」と。中には、専修大学生であることに自信を持てるようになったと言う学生もいます。

このように、きっかけは何でもかまわないので、専大生であることをポジティブに考えられるようになると、大学生活そのものが楽しくなっていきます。かつての私自身もそうでした。

### 専大が好きだからこそ、校友の絆が生まれる

私は、法制史を学びたいと思い、法学分野において名のある先生が何人も教壇に立っていた専修大学に進学しました。当時は、専大の歴史を振り返るような授業はありませんでしたが、恩師の鎌田浩先生が日本近代法史（特講）の授業で五大法律学校の一つだということや法典論争のときにどのような立場に立っていたのかなど、先達たちのすごさをいろいろと話してくださったおかげで、「専大を選んで良かった」という思いを強くしたことを覚えています。それに、もともと行きたいと思っていた大学に入れたのですから、大学生としての毎日は新鮮で、非常に楽しいものでした。

今の学生さんには、想像しがたいかもしれませんが、当時は、校歌や専大節を歌う機会が頻繁にありました。神宮球場へ野球部の応援に行けば、３～４曲ある応援歌とともに、必ず歌ったものですし、ゼミ活動やサークル活動でも、コンパの席でもみんなで歌ったものです。

あれは確か２年生のとき新宿で開いたコンパの席だったと思います。そろそろ締めの時間となったので、みんなで起立して専大節を大きな声で歌いました。一応、他のお客さんの迷惑にならないよう部屋の仕切りはすべて閉めていたのですが、歌い終わるとともに、その一つがスパンと外側から開けられたのです。みんな「怒られる」と覚悟しました。ところが、かなり年配のおじさまは開口一番「次、校歌を歌うな